

## 令和6年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」成果報告書

### 1 指定校・指定校群 ( 高松市立栗林小学校 )

#### 2 実施の内容

##### (1) KSR 担任による体制構築

令和5年度同様、担当教員による対応をすることで、学級担任とともに児童の生活の様子を観察し、自立につなぐことを継続する。児童によっては、学級への適応不安を有する者もあり、学級とのつながりをもたせるために、担当教員や学級担任が学習の状況や連絡事項を伝えるよう働きかける。KSR という環境を学校の基盤とする児童については、保護者や児童と話し合った上で、学級担任の関わるタイミングや方法を相談して取り組む。

##### (2) 安心できる部屋づくり

対象児童の対人関係への配慮として、KSR とする部屋 (以下「相談室」と称する) は普段は児童があまり通らないところを使用し、通室児童間の相性や保護者同伴の場合もあるため複数室確保する。また、児童や保護者の動線、靴箱の場所にも配慮する。通室児童の社会性や他者理解を深めるために、段ボール工作等協働作業ができる部屋を設ける。さらに、折り紙やパズル等、気軽に手に取って時間を過ごせるリラックsgグッズを置いたり、関係機関が提案する諸活動にも取り組むなど、気持ちをリフレッシュできる環境も整える。

##### (3) 保護者との共有時間の確保

保護者参観や保護者同伴通室などの支援を通して、保護者が児童の気持ちを受け止めつつ対応できるようにする。適宜、保護者懇談会も実施し、保護者自身の安心感にもつながるようにする。また、児童から KSR での過ごし方や学校生活への思いも把握し、学級担任や管理職にも伝えられるようにする。

##### (4) 計画的・継続的支援

個別の支援計画に加え、KSR 児童の記録を残すことで、担当教員と学級担任との連携を図るとともに、管理職も把握に努め、長期的な支援ができるようにする。学習は個に応じた指導を重視し、実態に応じて児童の負担にならない程度に教室とのオンライン授業を一部取り入れて学習の保障とするとともに、引率や一部授業への参加など、教室へ行くためのステップを意識する。テストや通知表の作成についても保護者の理解を得て、実態に応じて個別に実施する。

#### 3 成果

##### (1) 校内サポートルームにおける児童生徒の様子

###### ア 環境づくり

(ア) 相談室は、どの時間帯でも入室できるようにし、戸やカーテンを全開にすることで、室内の様子を確認して入室することができ KSR 児童が安心して登校することができた。また、児童があまり通らないところやベランダから入退室できるところを相談室として設置しているため、人目を気にせず入退室することができた。

(イ) 相談室にカードゲームやオセロ、折り紙、スクラッチアート等気軽に短時間で遊べるものやぬいぐるみ等のリラックsgグッズを置くことで、KSR 児童間同士の交流を深めることができた。

(ウ) 保護者と離れることが不安な児童は、別室で保護者と一緒に落ち着くまで過ごしてから相談室に入室したり、保護者の待機部屋を設置し KSR 児童と保護者との距離が少しずつとれるようにしたりした。

(エ) TVやタブレット、プリンター、イヤフォン等のICT機器を相談室に設置し、校内放送や学校行事等をTVで視聴したり、イヤフォンをつけてオンライン授業を受けたり、タブレットで調べ学習を行ったりして、児童が落ち着いて学習に取り組めるようにした。

## イ 担当教員の意図的な支援

(ア) KSR児童の毎日のスケジュールは、児童自身が自己決定し、それを尊重した。1人で計画できない時は担当教員が助言し、児童の意思を尊重しながら決めた。また、1日中相談室で過ごすのではなく、教室で生活したり学習したりできるようにするために、児童の様子を踏まえて、教室復帰の働きかけをしたことで児童自身が教室で過ごす時間を自己決定し、教室で過ごす時間が増えた。

(イ) 学習は、個別指導や集団指導を行い、個々の状況に合わせて学習を進めていった。また、相談室でデジタル教科書を使用して授業を実施したり、タブレットをTVに接続し実験等の動画を視聴したりして、学習の遅れを心配している児童・保護者に対応した。

(ウ) 担当教員が不定期に相談室のイベントを企画したり、養護教諭によるパステルアートやSCによるハリコ作りを計画し実施したりしたことで、KSR児童同士の交流を深めることや登校意欲につなげることができた。

(エ) 担当教員が、学級担任とKSR児童との架け橋になることで、学級担任との距離を縮めることができた。また、学級担任へ自分の思いを伝えることが難しい児童は、Teamsの投稿等で、毎日担任に提示することで気持ちを伝えることができた。さらに、学級担任との距離を縮めたことで、教室に入れなかった児童が教室に入ったり、行くことができなかった授業や給食に行ったりすることができるようになった。

(オ) 担当教員は、KSR児童の思いをしっかりと聞くことで児童と担当教員との関係が深まった。また、自分の思いを伝えることができなかった児童も何でも話をしてくれる関係となった。

## (2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

### ア 作成した作品を壁面掲示する

自己肯定感を高めるために、イラストや色塗り、折り紙等を作成し完成した作品を壁面掲示した。管理職や他の教職員が来室時に、作品を褒めるなど児童とのコミュニケーションにつなげた。

### イ イベント開催や講師による授業

担当教員がスライム作りや小物作り等のイベントを企画し実施した。また講師によるイベントでは、養護教諭によるパステルアートやSCによるハリコ作り、UK ドッグアカデミー遠藤先生のドッグセラピーを計画し実施した。さらに講師による授業では、図工専科の先生による図工の授業や書写専科の先生による書き初め、養護教諭によるSST「自分のストレンクスを見つけよう」等を実施した。担当教員だけでなく、いろいろな教職員と関わるよい機会となったし、KSR児童間同士の交流を深めることができた。

### ウ 給食

給食は、児童自身が各クラスに給食を取りに行った。毎日給食を取りに行くことを繰り返していくうちに、クラスの児童との交流が増えていった。また、相談室内では給食で最初に配膳された量が多い・苦手で食べることができないと感じたメニューについては、量を調節し、児童の食を少しずつ広げる取り組みを行った。

### エ 授業への引率やオンライン授業

勉強への遅れを不安に思っている児童や1人で教室へ行くのが難しい児童については、本人からの申し出によりクラスへの授業引率をした。また、担任と連携をして自宅や相談室からのオンライン授業を実施した。相談室からのオンライン授業は、他の児童に配慮してイヤフォンを着用して実施した。

### オ 生き物、植物の飼育

道徳教育として「命の大切さ」について学ぶために、花の種を植えて育てたり、「メダカ」を飼育したりした。そのことが共通体験となり、児童同士の関わりも増えた。

#### カ 全く登校できない児童への支援

全く登校できない児童には、PR活動として相談室内の様子や活動内容、相談室という場所がどんなものかわかるようなフライヤーを作成し配布したり、担任を通じて、相談室のイベント等を周知したりした。また、担当教員が家庭連絡や家庭訪問を行い、少しずつ児童との関係を深めていった。

#### キ スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用

スクールカウンセラーは通室児童の利用7人のべ27回、通室保護者の利用10人のべ34回の教育相談をしていただいた。また、スクールソーシャルワーカーは週1回来校し、通室児童・保護者の支援や学級担任へのアドバイス、ケース会に参加していただいた。KSR児童の一人一人がどのような課題を抱え、どう捉えているか、短期的長期的にどのようにしたいと考えているかニーズの把握が定期的実施できた。また、保護者の心が安定するように支援やKSRでの様子を観察していただいた。さらに、KSR児童や保護者の願いをもとに、今後の対応について、担当教員や管理職に助言をいただく等、通室児童への支援の参考にすることができた。

※利用期間はR6.4～R6.12までの人数です。

### (3) 総括

#### ・「明日も行きたい」と思えるような相談室にすること

イベント等の登校目的を作ることで登校意欲が生まれ、活動の楽しさを知ったり、児童自身が「この子に話がしたい」「あの子と一緒に教室へ行きたい」とKSR児童やクラスの児童との関わりが増えたりすることで、自然に登校への楽しさが生まれ、登校意欲が高まってくると感じた。

#### ・自主性ではなく主体性を身につけること

KSR児童ができないことを無理しようとしたり、相談室の目標を教室復帰としてしまうと、児童は教室に行こうと言われるのが不安になり、登校意欲が低下するケースがあった。児童のチャレンジ精神を大切にすることで、達成感や自尊感情が高まると感じた。また、担当教員は児童の主体性を尊重しながら、自尊感情を育て自分で乗り越えていく力を育む機会を作ることや児童が決めたことを焦らずに見守ることが大切だと感じた。

#### ・保護者の理解と協力

KSR児童が安全・安心に学校生活を送るためにも保護者の理解と協力は必要不可欠である。児童は家庭で学校での悩みを保護者に相談するため、保護者からの意見を十分に聞くことや保護者に相談室の利用や取り組みについてしっかり伝え、保護者が相談室に親近感や信頼感をもってもらうことが大切だと感じた。

#### ・「チーム栗林」で、KSR児童を支援すること

担当教員がすべてのKSR児童を支援することは難しい。いろんな方と接する機会を設けることで、一人一人に寄り添った支援ができ、児童の成長につながった。そのためには、学級担任や管理職、関係職員と情報共有し、連携を図ることが大切だと感じた。また、「9歳の壁」があるように、児童は様々な壁に直面するため、児童のちょっとした変化やサインを見逃さないように、教職員の受信力を向上し、対応していく必要があると感じた。